

## 神谷美恵子とフランクル—苦難の経験が開く地平

釘宮明美

### はじめに

ただいまご紹介にあずかりました白百合女子大学の釘宮です。今日はお忙しい中、大勢の皆様がご参加くださりまして、本当にありがたく思っております。拙い話になるかもしれませんが、どうぞよろしく願いいたします。

今回、神谷美恵子とフランクル——最初はどちらか一人を、そしてどちらを取り上げようかと迷ったのですが——、欲張りなことに二人を同時に取り上げるというチャレンジングなことをやってみたいと思います。皆様に事前に資料を配信させていただきました。主に二人の著作からの引用で、私の備忘録も兼ねています。かなりの分量となってしまいましたが、これは皆様へのお土産ということでもあり、要所要所を紹介していきますので、画面上のパワーポイントと共にご覧になっていただければと思います。

本日はまず、二人の人物それぞれの交差する主題と時代、次にフランクルと神谷美恵子の歩んだ道、二人の生き方と思想を手がかりにして、私たちの誰もが直面する生きていく上での苦難や苦悩に対してどう向き合っていくか、またそこからどのような地平が開かれてくるのかということについて一緒に考え、何らかのヒントを得ることができればと思っています。

### 1. 読み継がれる神谷美恵子とフランクル

さて、神谷美恵子とフランクルについては、もはや改めてご紹介するまでもないほど、大変よく知られており、両者ともその代表作がロングセラーになっていることは疑い得ないでしょう。つい先日、みすず書房の編集者の方とお話をする機会がありました。その方が、「みすず書房の財産」とも言え

るのがフランクルの『夜と霧』であり、神谷美恵子さんの『生きがいについて』である、とおっしゃっていたことが印象的でした。

神谷美恵子さんの『生きがいについて』が出版されたのは1966年で、新たに「神谷美恵子コレクション」として2004年に新装版が刊行されました。フランクルの『夜と霧』は、『ある心理学者の強制収容所体験』というのがドイツ語の原題でして、1946年にウィーンで出版されました。日本では1961年に霜山徳爾先生の名訳によって出版され、さらに近年では池田香代子先生による新しい翻訳がなされ、変わることなく版を重ねています。

なぜ、この二人の著作が長きにわたって静かに読み継がれているのでしょうか。フランクルに至っては、何も日本だけではありません。最近、アレクサンダー・バッチャニーというウィーンのフランクル研究所の所長が書いたフランクルの伝記を目にする機会がありました<sup>1</sup>。それによれば、フランクルの著作は32冊、そして31か国語で翻訳・出版されているということです。『夜と霧』はアメリカで1959年に英訳が出て、途中1963年以降は『人間の意味探求』と改題されました。本書は、アメリカで最も影響を与えた10冊の本の一つに数えられています。

日本では、2011年の東日本大震災以降に、フランクルの関連書籍の出版が相次いだことが注目されるでしょう。画面上に何冊か紹介しました。例えば、フランクルの『医師による魂の配慮』（邦訳『死と愛』）の第11版となる『人間とは何か—実存的精神療法』（春秋社、2012年）、河原理子『フランクル『夜と霧』への旅』（平凡社、2012年）、ピンハス・ラピーデ&フランクル『人生の意味と神—信仰をめぐる対話』（新教出版社、2014年）、フランクル『虚無感について—心理学と哲学への挑戦』（青土社、2015年）等です。他にもまだ数多く出版されています。

NHK教育テレビで「100分de名著」という番組がありますが、フランクルも神谷美恵子さんも共に取り上げられました。パワーポイントのスライド

---

<sup>1</sup> Viktor E. Frankl, *The Feeling of Meaninglessness: a Challenge to Psychotherapy and Philosophy*, ed. Alexander Batthyány, 1992. の序文より。邦訳、アレクサンダー・バッチャニー「ヴィクトール・E・フランクルの生涯とロゴセラピーおよび実存分析の発展」、『虚無感について—心理学と哲学への挑戦』広岡義之訳、青土社、2015年、43-44頁。

でご覧いただいている写真は、フランクルの『夜と霧』の英語版『人生の意味探求』およびドイツ語の新版『それでも人生にイエスと言う』です。

ところで、フランクルや神谷美恵子さんの著作を手にとってみるのは、どういうときでしょうか。何か大きな困難を体験したり挫折を味わったとき、病や死や何らかの不条理に直面したとき、あるいはこれは私自身の体験なのですが、迷いの中にいて進むべき道が分からなくなったようなとき、総じて言うならば、一見すると日陰を歩いているようなネガティブな状況下にいると感じられるとき、その著作を手にして慰めや力を得たという体験をされた方は、おそらく少なくないと思います。

神谷さんの主著『生きがいについて』にしてもフランクルの『夜と霧』にしても、共に「生きる意味」を問題にしています。私たちが人生の意味や意義が見出せず悩んでいるとき、少し立ち止まって考えたいとき、これらの著作を手にする機会が多いような気がします。それはこれらの書物が、やはり人間とは何か、生きる意義とは何か、私たちの生を根拠づけているものは何なのかという根源的な問いに触れているからではないでしょうか。

神谷さん自身が、この『生きがいについて』という書名をある友人に英訳して紹介した際に、a book of human nature と訳されています。またフランクルは、晩年のインタビューに答えて、自分の一生を顧みて「私は、他の人々が人生の意味を見出すのを援助することに、自分の人生の意味を見出した」と語りました。これは当時、日本でNHK教育テレビの番組で放送された際に視聴し、もうかなり昔のことではありますが、非常に印象深く覚えています。

個人的な体験で恐縮なのですが、私とフランクルの出会いについて少しお話いたします。私が『夜と霧』を知ったのは、大学二年生の時でした。その頃、通っていた大学の生協の書評誌の編集委員を務めていました。その編集委員会宛てに、あるフリーランスライターの方が手紙と共に『夜と霧』を送ってくださったのでした。若い学生の皆さんにぜひ読んでほしい本として紹介され、書評がしたためられており、次のようなことが書かれていました。1985年、群馬県の御巢鷹の尾根に日本航空機が墜落した事故がありました。乗客4名以外は全員死亡という未曾有の大惨事でした。その航空機にCAの一人と

して搭乗し、亡くなられた方の愛読書がこの『夜と霧』だったそうです。生存者の証言や残された記録から、この若いCAの方が最後まで職務を全うしようとしたことが伝えられています。書評を送って来られた人は、フランクルの態度価値ということを彼女の姿に重ねていました。

他方、『生きがいについて』ですが、私自身が学生時代に将来の進路で悩みに悩んでノイローゼ状態に陥っていた時期、神谷さんの著作に出会いました。当時は、『生きがいについて』よりも、むしろ『若き日の日記』に親炙していましたが、自分がどういう生き方をしたいのか、どう生きるべきなのか、どちらの道に進むべきなのか、そのヒントを切実に求めていました。その後、さまざまな経験を経て私自身が「再びの生」を得るような経験をし、そうしたことも相まって、カルチャーセンターやあちこちの講座で神谷美恵子さんについて話す機会をいただきました。色々なところで十六、七回は話していると思います。そういう場で、神谷さんの津田塾大学での教え子の方にお目にかかったり、『生きがいについて』に纏わる体験やご自身の人生を語ったお手紙をいただいたり、沢山の方に出会わせていただきました。

そして、フランクルの『夜と霧』を日本語に初めて訳された霜山徳爾先生についてなのですが、日本における臨床心理学の草分け的存在であり、実際にフランクルに師事して臨床を学ばれました。みすず書房から『素足の心理療法』や中公新書で『人間の詩と真実』、岩波新書で『人間の限界』など、非常に深い思想性をもった書物を出されており、『素足の心理療法』は私の愛読書です。フランクルや神谷美恵子——神谷さんと霜山先生とは、関係があったのか分かりませんが——と同じように、私の中では大きな影響を受けた大事なものとしてあります。

## 2. 交差する主題と時代

ところで考えてみますと、神谷美恵子さんとフランクルの間には、互いに共通点が多くあると思われます。しかしなら、二人が並べて論じられることは、あまりなかった気がしております。今日は、資料の一つとして年表をお付けいたしました。これは私が二人の生きた時代、そして二人の思想・主題

がどういところで交差するのかを探ってみたくて、簡単ではありますが、試しに作成してみたものです。

二人の共通点として5つ程のことが指摘できるでしょう。第一に、両者とも人生の意味・意義について探求しようとしてしました。「生きる意味」をフランクルはドイツ語で、Sinn des Lebens と表現しています。「意義」「意味」に相当するドイツ語が Sinn です。ドイツ語で「意味」という単語には、他に Bedeutung がありますが、これは記号的なニュアンスがあるからでしょうか、フランクルはもっと次元的な深まりを含意する Sinn という単語を用いています。だから、「意味」というよりむしろ「意義」という日本語のほうが、誤解が少ないかもしれません。そして、神谷さんの言う「生きがい」という言葉は、『生きがいについて』の序文の中で、フランス語に訳すとすれば *raison de vivre* や *raison d'existence*, つまり「生きる理由」「存在理由」という表現をとることが述べられています。

第二の共通点として、言うまでもなく二人とも精神科医であったことです。精神科医として臨床の現場で患者さんとの直接的・実践的な関わりの中で自らの思想を紡ぎ、逆に言えば、自らの思想を生きる場として実践があったと理解されるでしょう。この点は強調しておきたいと思います。

ただし、二人がどのような患者さんと向き合ったかについては少し違いがあります。フランクルが専門としたのは、神経症の患者さんたちの治療でした。何のために生きているのか分からず虚無感に苛まれている、こう訴えてくる人たちに関わって、その実践を通して実存分析とロゴセラピーという理論・手法を編み出していきます。他方、神谷美恵子さんは、ハンセン病患者さんたちの精神医療にあたりました。ある機会を得て、瀬戸内海に浮かぶハンセン病患者の療養施設、長島愛生園にて精神医学的調査を行います。生きがいがないと訴える患者たちに数多く出会い、そのことが一つの契機となって愛生園でハンセン病患者さんの精神医療に携わる道が開けていきます。

そして、第三点目としてフランクルも神谷さんも、自らが苦難や苦悩の経験者であったということ、しかも死に直面する過酷な体験を通して、生きる意味・意義や生きがいということテーマにしたのでした。二人とも人生のある時期に、完全に生きる意味や生きがいを喪失し、死を思う経験を経てい

ます。この点については、後ほど二人の人生の歩みについて詳しく見ていきますが、今ここで少し触れておくとすれば、ユダヤ人であったフランクルは、第二次世界大戦中にナチスによって強制収容所に輸送され、辛うじて生還しました。神谷さんにおいては、著作にもところどころ跡が窺えますが、ある人との死別やそこから受けた心の痛手、また彼女自身が死に直面するような病気に罹るなど、まだ若い頃の苦しい体験から、自分の生きる方向やこの世で何をもって生きていくのかが見出せずに、かなり長い間、苦悩と混乱の時期を過ごしました。

二人とも生の意味を見失うような体験をし、そうした過程を経て再びの生を見出していったのです。そして、この生きる意味・意義ということ自体をテーマとして、各々の患者さんたちとの関わりの中で実践されました。これは、非常に重要な点だと思います。

さらに四つ目として、二人ともたいへん幅広い哲学的・思想的な教養をもっていたことを指摘できるでしょう。両者とも専門は精神医学ですが、その精神医学の中でも実存哲学や現象学などをバックボーンとした思想、思想的背景をもっていたことは無視できません。フランクルも神谷さんも、共通してヤスパースなどによく言及しています。また、フランクルはハイデガーやキルケゴールの思想にも親しんでいますし、神谷さんの若い頃の医学生時代の日記を読むと、多数の思想家や哲学者からの夥しい引用が為されています。このように二人ともその思想は、精神医学という専門分野にとどまることなく、より幅広い哲学的人間学とってよい射程を有しており、そこから人間の生の基盤であるところの超越との関わりという問題が鮮明になってくるのです。それを直截に「神」と表現してもよいのですが、神谷さんは「人間を超えたものとの関わり」、フランクルは「超越との関わり」という言い方をしているので、今はこの表現を用いておきます。

実はフランクルは、非常に敬虔なユダヤ教の信仰の持ち主でした。また神谷さんは、生まれ育った環境から無教会キリスト教の影響を強く受けています。ただ、心理的には無教会に対して少し距離を感じていた時期もあり、留学中にはクェーカー派の沈黙礼拝に共鳴し、また『生きがいについて』の中では、特定の宗教に限らずに人間の心の在り方としての宗教という観点から

捉え直しています。人間の宗教性、あるいは霊性という言葉を使ってもよいかもしれません。そこには、人間を超えたものからの関わりの中に生かされている人間存在という視座を看取することができます。

最後に五つ目の点として、二人の生きた時代についてです。フランクルは1905年に生まれて1997年に亡くなりました。神谷さんは1914年に生まれて、亡くなられたのは1979年です。共にまさに20世紀の同時代を生きており、二人の生涯は二度の世界大戦に重なっています。年表では左側に神谷美恵子、右側にフランクルとし、暦年・年齢を対照できるように作成してあります。

果たして二人に直接の面識や何らかのやり取りがあったのかどうか、気になるところです。これについては私自身、興味をもって調べてみましたが、管見の限りでは、二人が実際に会ったり交流したことが分かるような形跡は、見出せませんでした。ただし、神谷さんの著作『生きがいについて』の中には、フランクルに言及し、またフランクルの著作を参照した箇所があります。さらに言えば、フランクルの『夜と霧』、ドイツ語の原題で『ある心理学者の強制収容体験』が、アメリカで英語に翻訳され『死の収容所から実存主義へ』という題で——最初の英訳ではこのような題名でした——出版されたのが、実は1959年でした。そして、この同じ1959年に神谷さんは『生きがいについて』の構想を始め、執筆を開始しているのです。本書は長い熟成期間を要して何度も改稿され、七年かけてようやく脱稿し、1966年に出版されました。その間に、神谷さんはフランクルの著作を読んでいます。

神谷さんの著作中に出て来るフランクルへの言及、ないしそれと分かる箇所を3つご紹介しましょう。まず、1959年11月10日の日記からです。当時勤務していた神戸女学院大学への通勤の途中、山道を歩きながら、「己が存在の意味を感じないでは生きていられない人間の精神構造を思う。……イミ感について、という書きものをまとめてみたい。パトロギッシュ〔病的〕な場合もふくめて」<sup>2</sup>との記載があります。

この「イミ感」という言葉ですが、『生きがいについて』の第一章「生きがいということば」には、次のように述べられています。「生きがいということ

---

<sup>2</sup> 神谷美恵子『日記・書簡集』みすず書房、1982年、132 - 133頁。

ばの使い方には、ふた通りある。……生きがいの源泉、または対象となるものを指すときと、生きがいを感じている精神状態を意味するときと、このふたつである。このうち、あとのほうはフランクルのいう「意味感」にちかい。これをここでは一応、「生きがい感」とよぶことにして、前のほうの「生きがい」そのものと区別して行きたい<sup>3</sup>。

そして、三番目の箇所として『いきがいについて』の中心部分と言ってもよい、第六章の「生きがい喪失者の心の世界」の中で、「苦悩の意味」を論じた箇所、まさにフランクルの「態度価値」について言及しています。「苦しみにも意義を発見したい人間を納得させるために、昔からいろいろな意味づけがこころみられてきた。……烈しい心身の苦しみを耐え忍ぶだけでなく、積極的なよろこびと希望にあふれて世を去っていったひとびともある。フランクルが「態度価値」と呼んで多くをのべているのも、このようなキリスト教的土壌の上に育ったものとして理解される」<sup>4</sup>。これは、あるキリスト者の詩（キング夫人著、三谷隆正・三谷寿貞子共訳『病院における説教』）の引用を挙げて、その解釈として述べられている箇所です。

### 3. フランクルの人生行路

それでは、ここから最初にフランクル、次に神谷美恵子さんについて、苦難の体験をスライドと年表・引用の資料を参照しながら、やや詳しく見ていくことにいたしましょう。

#### (1) 強制収容所体験と解放後の苦悩

ヴィクトール・エミール・フランクルは、1905年にウィーンに誕生しました。少年時代から非常に早熟で、10代前半から心理学や精神医学、哲学に関心を抱きます。当時のウィーンでは、精神医学で重要な二つの主流派がありました。フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学です。フランクルは、それらを批判的に摂取しながら、後にロゴセラピーと呼ばれる実存分析に基づ

---

<sup>3</sup> 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980年、15頁。

<sup>4</sup> 同上、133、135頁。



く精神療法を行っていくことになるわけなのですが、実際は、フランクルの理論は、強制収容所に移送される以前にある程度作り上げられていたと言われています。

また、特筆すべきこととして年表にも書きましたが、26歳の時にウィーンに青少年のための相談所を開設しました。シャルロッテ・ビューラーらと一緒に、青少年に対して無償の心理カウンセリングを開始し、実に900名の症例をフランクル自身、体験したと述べています。彼は臨床に非常に力を注ぎ、その経験を通して人間の苦悩する力や、意味への意志に対して目が開かれていったのでしょう。しかし、ナチス・ドイツによるオーストリア併合によって、ユダヤ人患者の診療だけしか許されなくなりました。次第にユダヤ人迫害が激化して、1942年、37歳の時にフランクルも強制収容所送りとなってしまいます。4つの収容所を転々と移送されて、1945年によく解放されました。奇跡的としか言いようのない生還でしたが、強制収容所に送られた親族8人の中で、生還したのはフランクルただ一人でした。オーストラリアに亡命していた妹だけは助かりますが、両親も兄も最初の妻ティリーも含め、ほぼすべての肉親を失ったのでした。

フランクルは速記記号を用いて自分の思想を書き記し、自分の分身のように密かに隠し持っていました。それさえも収容所で没収されてしまいます。けれども、解放後に記憶を頼りに復元して、『医師による魂の配慮——ロゴセラピーと実存分析の基礎づけ』と題して出版します。日本語訳で『死と愛』と訳されている本です。その後、わずか9日間で口述筆記により、『夜と霧』として知られる本を完成させて出版したのでした。新しい妻となるエリー——彼女はカトリックの信徒でした——と出会い、彼女の献身的な支えを受けながら、ウィーンで医師として活躍し、1997年に92歳で亡くなりました。

フランクルは、どのような人間観を持っていたのでしょうか。先程、申しましたように、強制収容所体験よりも前に、多くの患者さんとの臨床体験を通して気づいていたことでしたが、彼は、人間は「意味」や「意義」を志向する「精神的存在である」と考えました。この「精神的存在」ということを、非常に強調しています。というのも、すべては無意識の衝動からに過ぎないと主張したフロイト、また人間の行動は劣等感に左右されると考えたアド

ラーに対して、フランクルは人間が意志の自由をもった責任ある存在であることにむしろ目を向けたからです。人間の身体的次元、心理的次元、精神的次元のうちで、特に精神的次元を重視しました。「精神」はドイツ語で Geist と言いますが、この Geist には「霊」という意味があることに注意すべきでしょう。

フランクルによれば、人間はただ単に衝動や劣等感に還元されるのではなく、つまり人間の行動原理はそのすべてを一義的に還元して説明し尽くされるわけではありません。自ら意志して、自分で態度を決めて自由に選択し、行為を決定することのできる、その意味で責任ある存在です。そして、この選ぶことができるということ、つまり意志の自由を有している以上、ではこの「自由」が「何から何に向かって」の自由であるのか、ということが問題になってきます。

フランクルは次のように述べています。「人間の意志の自由とは、衝動から責任に向かっての、つまり「良心」に向かっての自由である。」<sup>5</sup> 後で見ますように、この「良心」という言葉が繰り返されています。さらに、フランクルの主要著書の一つ『神経症』からの引用ですが、「実存するということは、自己自身から出て、自己自身に向かって歩むことである。」<sup>6</sup> という一節があります。どのような状況にあっても、それに制約されずに自己自身で態度を決める自由と責任を持っている。今、現にある自己自身を超え出ていくことができるのだ、自己超越できる存在だとフランクルは述べるのです。このように人間が「意味」を志向し、現にある今の自己自身を超え出ていこうとする「意志」に呼びかけて、それを目覚めさせていくのがロゴスを用いたセラピー、すなわちフランクルの言う「ロゴセラピー」でした。ギリシア語のロゴスという語は、日本語に訳そうとすると「言葉」や「理性」や「意味」や「論理」など色々な訳語が当てられます。

ナチズムのユダヤ人迫害が激化する中で、フランクルの周囲の人々は、仕事の継続と完成のために亡命を勧めます。ところが、彼は亡命をしませんで

---

<sup>5</sup> V.E. フランクル『識られざる神』佐野利勝、木村敏訳、みすず書房、2002年、61 - 62頁。

<sup>6</sup> V.E. フランクル『神経症——その理論と治療』宮本忠雄・小田晋・霜山徳爾訳、みすず書房、2016年新装版、92頁。

した。ウィーンに留まる決意をしたのです。それは何故だったか。あるエピソードを紹介した引用の資料をご覧ください。

ウィーンを中心街にシュテファン大聖堂という美しく聳え立つ大きな教会があります。フランクルは両親からも亡命を勧められましたが、両親を残して自分だけがアメリカに亡命してよいのか、非常に迷うわけです。悩んだ彼は、このシュテファン大聖堂を訪れてオルガンの音色を耳にししながら、ずっと考え続けました。しかしながら、どう考え抜いても解決策がありません。決心ができないのです。自分の責任は何であるのか、ライフワークに力を注ぐことであるのか、両親の面倒を見ることなのか。フランクルは家に帰りました。すると、たまたま父親が一片の石のかけらをもっていました。熱心なユダヤ教徒だった父親が、シナゴグの廃墟から拾ってきたものでした。この石に刻まれていた文字が、十戒の一部でした。以下、引用をお読みいただきます。「父が言った。『ヴィクトール、この石が十戒のどの部分か私にはわからないだよ。この文字で始まる掟はたった一つしかないからね——あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜る地で、あなたが長く生きるためである』その瞬間、私は自分に言った。これが答えだと。私のビザはそのまま期限切れになった。」<sup>7</sup>

このエピソードは、教え子の一人であったアメリカ人のハドン・クリングバーグ・ジュニアが、フランクルの晩年に長期にわたるインタビューを試みて再構成したフランクルの評伝に出てまいります。赤坂桃子さんの翻訳で、『人生があなたを待っている—「夜と霧」を超えて』と題してみすず書房から出版されています。本書には、フランクルの堅固な信仰に始まって、制約された諸状況の中で彼自身がどう考え、実際にどのように生きたが分かる場面が多々あります。

アウシュビッツの強制収容所に移送された時のこと。彼は原稿——先に述べました『医師による魂の癒し』（邦題『死と愛』）となる原稿——を書いていたが、それも没収されてしまいます。フランクルは、その時こう思っ

---

<sup>7</sup> Haddon Klingberg, Jr., *When Life Calls Out to Us: The Love and Lifework of Viktor and Elly Frankl*, New York 2001, pp.101-102. クリングバーグ『人生があなたを待っている I <夜と霧>を超えて』赤坂桃子訳、みすず書房、2006年、163頁。

たのだそうです。「原稿が出版できるかどうかにその意味が左右される人生なんて、結局のところ生きるに値しないと。私はたった一枚の紙切れに私の原稿の何ページ分にも代わる神からの使命を見ている。だからこれからは、紙に書き留める代わりに、自分の考えを生きていこうと。」<sup>8</sup>

何故そのように思い至ることができたのか。不思議にも、ここでも偶然の一致としか言いようのない出来事が起きます。着ていた服を収容所で剥ぎ取られたフランクルは、代わりに亡くなった囚人のぼろ服を与えられます。その服のポケットに一枚の紙切れが入っていました。シエマ・イスラエルで始まる祈り、ヘブライ語聖書の申命記6章5節の一節「汝のすべての心とすべての魂とすべての力をもって、汝の神を愛しなさい」という、ユダヤ教徒にとって最も大切な祈りの言葉が記されたページでした。それを見てフランクルは、原稿が出版できるか否かよりも、自分の思想を紙に書き留める代わりに、この自分の思想を生き抜くことだ、それが自分に今、与えられている使命なのではないかと悟ったというのです。「艱難であれ、たとえ死であれ、どのようなことに直面しても、人生に対して「イエス」と答えよ。」<sup>9</sup> そういう教えだと解釈したのでした。

フランクルが強制収容所で体験した諸々の出来事は、『夜と霧』の中に詳しく述べられていますので、ここでは解放後のことについて触れたいと思います。収容所から解放されて故郷のウィーンに帰還したものの、フランクルを迎えてくれる家族は誰一人としていなかったのです。父親は、収容所で早い時期にフランクルの手に抱かれて餓死しました。母親も殺されました。そして最初の妻エリーは、解放前後に腸チフスで既に病死していました。彼女の死を知った時のフランクルの手紙を、引用の資料に紹介しました。長いですが、お読みいたします。

こうして僕は天涯孤独の身となりました。同じ運命を背負った人でないと、理解してもらえないでしょう。言葉にできないほど疲れ、言葉にできないほど悲しく、言葉にできないほど孤独です。この先は希望な

---

<sup>8</sup> 同上、邦訳、206 - 207 頁。

<sup>9</sup> 同。

どまったくありませんが、恐れるものも何一つありません。人生の喜びはもはや存在せず、あるのは義務だけです。僕は良心に支えられて生きているんです……。そんなわけで今はふたたび腰を落ち着け、口述で原稿を書き直しています。(中略)でも、……すべてのものが僕には何も語らず、何も意味をなしません。もっとも善い人たちは戻ってこず(僕の最良の友フーベルトは斬首刑に処せられました)、僕を一人きりにして去りました。収容所で僕たちは自分がてっきり人生のどん底にいるのだと思っていました。でも故郷に戻り、何をしても無駄で、自分をかろうじて生かしてくれていたものも打ち砕かれ、ようやく人間らしい暮らしができるようになった今、自分はまだ底なしの苦しみの沼に沈んでしまいたいそうだと感じざるをえません。今はほんの少し泣いて、ほんの少し聖書の詩篇のページをめくる以外、できることなど何もありません。(中略)

僕はこの岩のごとく堅固な肯定的人生観をもっていなかったら、この数週間、いやすでに強制収容所にいたあの歳月にどうかなってしまっていたでしょう。けれども今では僕は物事を別の次元で見えています。人生は無限に意味深く、そのために苦しみや挫折の中にすら意味があるにちがいない、とますます思うようになりました。そして僕に残されている唯一の慰めは、自分は与えられた可能性を実現したのだと、良心をもつて言えることです。可能性を実現したとは、現実のものとすることで可能性を「救い出した」ということです。<sup>10</sup>

これは1945年9月14日に فرانクルが二人の友人に宛てて書いた手紙の一節で、未発表の書簡や草稿、講演を収録した『夜と霧の明け渡る日に』という本からの引用です。奇跡的に生きながらえて生還したにも関わらず、愛する人のほとんどが殺され亡くなってという現実と直面したときのフランクルの絶望すれすれの悲しみと慟哭。良心に支えられてのみ、辛うじて生への意志を取り戻そうとしていることが読み取れます。この時期のフランクルの

---

<sup>10</sup> アレクサンダー・バッチャニー編、フランクル『夜と霧の明け渡る日に』未発表書簡、草稿、講演』赤坂桃子訳、みすず書房、2019年、57 - 58頁。

手紙には、「自分の人生を取り去ってほしい」という言葉を始め、慰めも希望も喜びもない、すべてのものが重要性を失って、収容所にいる時よりもさらにどん底の状態に絶望に陥った心境を物語る言葉が残されています。日付が記されていませんが、こんな詩も書いています。

きみたちが僕にのしかかる 僕の死者たちよ／僕のまわりにいるきみ  
たちは もの言わぬ責務／きみたちのために生きること／それを僕は求  
められている／きみたちが負ってくれた絶滅を あがなうことを／きみ  
たちがまだ苦しんでいることを 僕が苦しまなければ／／きみたちから  
折り取られた喜びを喜び／為されていないきみたちの行いを為し／毎朝  
きみたちに代わって太陽を享受し／毎夕きみたちに代わって空を眺める  
／毎夜きみたちに代わって星々に合図し／毎日（僕の日々という名の）  
階段を築き／そして すべてのバイオリンがきみたちのために歌うのを  
聞き／そして すべての接吻をきみたちに代わって請い求める……／太  
陽のすべての輝きの中で／きみたちのまなざしが言おうとしていること  
がわかるまで／咲きほこる木の花のもとで／亡き人が僕に合図をしてい  
るのを見つけるまで／きみたちがすべての小鳥のさえずりに／きみたち  
の声をゆだねていると気づくまで／彼女は（きみたちは）僕にあいさつ  
をしようとしているのか／それとも 言おうとしているのか／僕が生き  
つづけることを許すと？<sup>11</sup>

この詩の中には、生き残った者が亡くなった人に対して感じるある種の負  
い目や罪責感と、それゆえの責任、贖いの意識のようなものを見て取ること  
ができるのではないのでしょうか。無残にも逝った人がいるにも関わらず、自  
分は生きていてよいのか。死者は生者に対して、何を言い残したかったのか、  
伝えたかったのか。「彼女」というのは、わずか2年にも満たない結婚生活し  
か許されなかった妻ティリーのことかもしれませぬ。彼ら・彼女の為し得な  
かった生の代償として、亡き人たちへの贖いとして、自分自身が彼ら・彼女・

---

<sup>11</sup> 同上、68 - 69 頁。

そして自分自身の苦悩にふさわしくあること、つまり、どう生きるのか問われた者として生きること。強制収容所体験は فرانクルが自らの理論を生き証し、遂行する場となったと述べましたが、むしろ収容所から解放されて自分を迎えてくれる人が誰一人もいなかったという更なる過酷な現実と苦悩の中で、執筆をしながら、書くことを通してよりいっそう強くこの使命と課題と対峙していくことになったとも言えるでしょう。

## (2) 苦悩の意義と問われた者としての人間存在

『夜と霧』の中で「苦悩の意義」について述べた箇所を一緒に読んでみたいと思います。引用の資料「ドストエフスキーはかつて、『私は私の苦悩にふさわしくなくなるということだけを恐れた』と言った。』<sup>12</sup>で始まる文章をご覧ください。「その苦悩にふさわしく」あるかどうか。その苦悩ということ自体が実は「一つの業績」でありそこには「内的な業績が存する」とフランクルは言うのです。さらに、既に亡くなった人が確かに苦しみながら生きたその証し、それは決して失われることはないのだ、と強調します。

そこから、よく知られたフランクルの「三つの価値」という考え方が出て来ます。「創造的に価値を実現することができる活動的生活や、また美の体験や芸術や自然の体験の中に充足される享受する生活が意義をもつばかりでなく、さらにまた創造的な価値や体験的な価値を実現化する機会がほとんどないような生活——たとえば強制収容所におけるがことき——でも意義をもっているのである。……人間が全く外部から強制された存在のこの制限に対して、いかなる態度をとるか」<sup>13</sup> たとえどんなに制約された状況の中にあっても、人間には倫理的に高い価値の行為を実現させる可能性がまだ残っていることに、目を向けさせます。そこに「態度価値」を実現する機会が潜んでいるのです。「生命そのものが一つの意味を持っているなら、苦悩もまた一つの意味をもって」おり、苦悩と死があってはじめて人間の実存が全きものにされるのだと、フランクルは考えました。

「創造的価値」「体験価値」に続く三番目の「態度価値」とは、人間が逃れ

---

<sup>12</sup> V.E. フランクル『夜と霧』霜山徳爾訳、みすず書房、1961年、167頁。

<sup>13</sup> 同上、168頁。

えない運命や苦悩、生命の危機に晒されているような制約された状況下で、いかなる態度をとるかということの中に実現される価値のことを意味します。『夜と霧』で最も有名な一節、人は人生の意味を問うのではなく、むしろ「問われた者」として人生の意味や意義を体験するのであるとは、ある種のコペルニクスの転回と言ってよいかもしれません。「人生はわれわれに毎日毎時間、問いを提出し、われわれはその問いに、詮索や口先だけではなく、正しい行為によって応答」<sup>14</sup>する責任があるのです。「応答する」とはドイツ語でantwortenで、「責任」Verantwortungという語には同じ語根が使われています。「人生というのは結局、人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならない」<sup>15</sup>とフランクルは続けます。

この「使命」という言葉を、フランクルは何度も用いていることに気づかされます。「命を使う」と書いて「使命」と読みますね。また、「意味」は「価値」とは異なって、具体的で一回的なもの、独自性に満ちたものです。だから「意味」は、どのような状況の中にあっても見出され、誰もが発見することができるものなのです。

フランクルによれば、人間は個々の具体的な出来事を通して語りかけられ、呼びかけられ、「問われている」存在です。この「問われている」という人生の受け止め方は、フランクルにおける特徴的な考え方・思想と思われまふ。問われている、つまり私たちが問いに答えようとするとき、そこには人間に問いかけている存在があらかじめ前提とされていることにならないでしょうか。言い換えれば、人間に語りかけ、呼びかけ、問いかけている存在がある、ということです。それは一体、何であるのか。

それは意味や意義の根源と言ってよいわけなのですが、興味深いのはフランクルが「態度価値」は人間の「良心」によるものであると述べている点です。問われた者としての私たちは、問いかけられており、それに対して応えようとするのだけれども、それは良心に基づいて応えるのであり、この良心自体が実は「超越からの声」であると述べるのです。

---

<sup>14</sup> 同上、183頁。

<sup>15</sup> 同。



日本語にも翻訳されたフランクルの著書で『識られざる神』という本があります。なお、この題名は、もしかすると「無意識の神」とか「意識されない神」と訳したほうが内容から正確かもしれません。フランクルによれば「良心」の起源は、人間に内在し、かつ人間を超越する宗教的な次元にあり、それは「超越からの呼びかけ」に他ならないと解しました。「良心それ自身が超越の声であるのだから、……人間はこの声をただ聴き取るだけのもの」であって、しかも「この声は人間から発せられているのではない」。そうではなく、「むしろ逆に、良心の超越的性格が初めて、私たちに人間というものがどうい  
う存在であるかを理解させてくれる」<sup>16</sup>。そして、この超越の呼びかけを良心において聴き取り、その呼びかけがその人の中で響き渡る程度に応じて、人は人格になると言うのです。

フランクルが一例として挙げるのは、旧約聖書の預言者サムエルの召命の場面です。サムエルは初め、神からの呼びかけに応え損なってしまうのですが、三度目になって「はい」と答えます。呼びかけられ、問われることを通して、それにいかに全身全霊で応えていくか。ここには我と汝、神と人間との倫理的・人格的な応答関係があります。こういう超越的な根源に遡ることなくして、人間の良心を説明し尽くすことはできないとフランクルは考えました。

ユダヤ・キリスト教は、神の言葉に聴く宗教であると言えます。アブラハムにしても、モーセにしても、神の言葉を聴いて旅立ちました。また、旧約聖書の創造記には、被造物の創造の由来が記されていますが、神の「言葉（ダーバール）」によって創造されていく過程は、まさに神の言葉が被造物の命と存在を呼び起こし、それが「出来事（ダーバール）」となっていく過程に他なりません。逆に言えば、私たちが直面する「出来事」の背後には「誰か」の言葉が、聖書的に言えば「神」からの呼びかけ、語りかけがあり、神からの「言葉」があると考えることができるのではないのでしょうか。そこに、導きが隠されているのではないのでしょうか。そのように解することも可能だと思えます。

---

<sup>16</sup> V. E. フランクル『識られざる神』前掲、63 - 64 頁。

#### 4. 神谷美恵子の人生行路

フランクル思想の背後には、このように超越との関わりが息づいています。それでは、神谷美恵子さんの『生きがいについて』ではどのように述べられているのでしょうか。次に神谷さんの経験に遡りつつ、読み解いてみたいと思います。パワーポイントのスライドに神谷美恵子さんの生涯と思想を、かなり詳しく書いていますが、時間の関係でまとめて説明いたします。

##### (1) 若き日の生きがいの喪失体験

神谷美恵子は1914年、岡山県に生まれました。旧姓は前田と言います。父親の前田多門は、若い頃は無教会キリスト者の交わりに属し、また新渡戸稲造の薫陶を深く受けました。戦後、天皇の人間宣言を起草した人物でもあります。兄は後にパスカル研究者となる前田陽一。母方の叔父金沢常雄は無教会の独立伝道師で、前田家にはキリスト教が精神的エトスとして色濃くあり、神谷さんもそうした雰囲気の中で成長しました。父親の仕事の関係で、少女期をスイスで過ごし、やがて津田英学塾で英文学を主に学びます。

無教会キリスト教の伝道師であった叔父の金沢常雄に、讃美歌のオルガン弾きを頼まれて、ハンセン病患者の療養施設である多磨全生園を訪れたのが、神谷さんがこの病気の患者さんと出会った最初の出来事でした。だいたい19歳～20歳頃のことではないかと推測されています。神谷さんが初めて患者さんたちに出会ったこの時の印象というのが、彼女ならではの独特なものでした。

『遍歴』と題した自伝の中に、当時を回想した場面が記されています。引用の資料をご覧ください。良い治療薬のなかった頃で、病みくずれている患者さんたちの姿を目の当たりにして、大きなショックを受けます。しかし、患者さんたちは「たからかに讃美の歌を歌い、信仰によるよろこびの感想を次々と語っている。これはどういうことか、と私はふるえながらじっと聞いていた。」<sup>17</sup> 患者さんたちの傍らで立ち働く三上千代さんという看護師さんの態

---

<sup>17</sup> 神谷美恵子『遍歴』みすず書房、1980年、75頁。

度に、彼女は心を奪われます。そして「ああ、私もこの方のように、こういう患者さんのところで働きたい！ここにこそ私の仕事があったのだ！」という強い思いが沸き上がり、「苦しむ人、悲しむ人のところにしか私の居どころはない、とすぐさま思い定めてしまった」<sup>18</sup> のでした。

この思いは一つの希求となって心に刻まれ、以後ずっと神谷さんにとって導き星となります。それにしても、ただ一度の出会いによって受けた衝撃が、願望以上のものに育っていったのは、なぜなのか。改めて考えてみると実に不思議に思われないでしょうか。

27歳にしてようやく医学を学び始めるまで、後述するようにさまざまな変遷を体験することになるのですが、医学生時代の29歳のとき、岡山にあるハンセン病患者の療養施設「長島愛生園」を訪れ、何日間かを過ごしています。その折の「愛生園見学の記」の序文には、アッシジのフランシスコの「苦しみと悲しみの十字架こそ我々の誇り得るものである」という言葉を引用した後、次のような一節を記しています。「約10年も前のこと、一つの「生きる意義」raison de vivreを喪って宙を漂う私の前に、……新たな「生きる意義」として立ち現れたのが癪への奉仕ということであった。」<sup>19</sup> つまり先に述べた、神谷さんが叔父と多磨全生園を初めて訪れた時というのは、彼女が「生きる意義を失って地を漂」っていた時期であり、そこに立ち現れたのがハンセン病患者さんのために働きたい、奉仕したいという思いだったのです。

ところで、彼女がハンセン病医療に志した背景に関して、近年、幾つかの資料が既にご遺族の了解のもとに公開されています。2014年にみすず書房から新版で刊行された詩集『うつわの歌』にも、初めて公にされた詩が掲載されました。神谷さんが亡くなられた1979年、65歳のときに書かれた詩であり、「絶望の門」と題されています。以下、引用の資料より一部お読みいたします。

かつてうら若き日に私は兄を通して／うつつならぬ愛を与えられたが、  
／ことば一つ、文一つ交わすこと許されず／会うことも一切できなかつ

---

<sup>18</sup> 同。

<sup>19</sup> 神谷美恵子『旅の手帖より』みすず書房、1982年、8頁。

た／／たぐい稀なる才と感性のその人は／あつという間に病に倒れ／四年もの間、その若き命を／次々とむしばまれて行った／／その姉上も妹も同じ病に逝き…（中略）…その病ゆえに私はみまうことも禁ぜられ／遠くから間接に案じ、深まり行く絶望に生きた。／／再起不能ときくや私は／できもせぬことを決意した／一生自らはたらいで／その人との生活を支えようと準備した／／「とうとうだめでした」／ある朝、兄と私は車で父上に会い／彼の目から涙がふりおちるのをみた。／その日、私の天地は崩壊した。…（中略）…／ひとり、どうやって生きよう／前途はしっこくで道をぬりつぶしていた／（以下略）<sup>20</sup>

この詩に登場する人物が、神谷美恵子さんこと旧姓前田美恵子さんに「ダントの愛」を捧げて、腎臓結核で病没した野村一彦という人物でした。その姉も親しかった妹も、間もなく結核で亡くなっています。野村一彦は、銭形平次捕り物帖の生みの親である野村胡堂の長男です。幼い頃から音楽に秀でた才を見せ、神谷さんの兄陽一とは成城高等学校の同級生で、叔父金沢常雄の中原聖書集会にも連なっていました。しかし、腎臓結核のため長期療養を余儀なくされ、東京帝大美学科在学中にわずか21歳で夭折しました。

一彦と美恵子さんとは、実際には病気のため会うことはほとんど叶わず、実際も周囲から賛成を得られませんでした。しかしながら、死後、一彦の遺したノートには美恵子さんへの溢れる思いが綴られていたのです。その文章は、野村一彦著『会うことは目で愛し合うこと、会わずにいることは魂で愛し合うこと。——神谷美恵子との日々』（港の人、2002年）で読むことができます。純粋な愛とその信仰は、多分にプラトニックであれ、切実に胸を打たれるものがあります。神谷さんはこの手記を野村胡堂夫妻から託され、思いを交わすことなく逝った一彦の胸中に触れて、非常な衝撃を受けたのです。その心理的打撃は、長い間持続したようです。彼女自身、当時は母となること、妻となる生き方を素朴に夢見ていたので、彼のノートに綴られた魂の苦闘と清らかな愛に心打たれるとともに、だからこそその喪失の大きさに

<sup>20</sup> 神谷美恵子『うつわの歌 新版』みすず書房、2014年、55 - 57頁。

「天地が崩壊した」ようなショックを受け、今後どうやって生きてよいか分からなくなる程に打ちのめされます。

『生きがいについて』の第五章「生きがいをうばい去るもの」では、著者である神谷さん自身の体験を反映した表現で、自身の日記からそれと分からない仕方で引用されている箇所があります。例えば、資料に引きました「将来を共にするはずであった青年に死なれた娘の手記」から、「ガラガラガラ。突然おそろしい音を立てて大地は足もとからくずれ落ち、重い空がその中にめり込んだ。……彼は逝き、それとともに私も今まで生きてきたこの生命を失った。もう決して、決して、人生は私にとって再びもとのとおりにかはえられないであろう。ああ、これから私はどういう風に、何のために生きて行ったらよいのであろうか。」<sup>21</sup> といった箇所です。

神谷さんはこの章の中で「生きがいをうばい去るもの」の具体例として「運命というもの」「難病にかかること」「愛する者に死なれること」「人生への夢がこわれること」「罪を犯したこと」「死と直面すること」の五つを挙げ、ヤスパースの言葉を借りて、これらを「限界状況」と呼んでいます。しかし考えてみますと、これらはいずれも神谷さん自身もまた体験した出来事であったと言えるでしょう。野村一彦の死は、愛する人に死なれる体験であり、自分が思い描いていた人生の夢が壊れる体験でした。それだけでなくさらにその後、津田英学塾に在学中、神谷さんも二度にわたって結核に罹患します。一時は死の宣告さえ受ける程でした。

太田雄三『喪失からの出発——神谷美恵子のこと』（岩波書店、2001年）で紹介されている彼女の日記には、こんな一節が見出されます。「この世にあらゆる希望を失った人の世界こそやっぱり私の世界なのだ、と思わずには居られない。（中略）癩病院へ行き度いといふのも何も犠牲的精神からではない。ただ、自分に congenial な [気の合った] 人々の中で住みたいと願ふだけなのだ。」<sup>22</sup> なぜハンセン病患者さんの医療に携わろうとしたのか。患者さんたちに対して、どのような想いを抱いていたのか。神谷さん自身もあらゆる希望

---

<sup>21</sup> 神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房、1980年、102頁。この箇所については、太田雄三『喪失からの出発』岩波書店、128頁の未公開の日記1940年1月17日を参照のこと。

<sup>22</sup> 太田、前掲書、80頁。

を失うような経験をし、苦しみと悲しみを知る者であったからこそ、ある種の限界状況を生きる者としての患者さんたちに近い思いを抱き、だからこそ、自分自身を患者さんたちと同じ側にいる者として感じる眼差しを持ち続けたのではないのでしょうか。

野村一彦の姉も、神谷さんと親しかった妹も同じ結核で亡くなります。しかし、神谷さんは助かりました。療養期間中に命の続く限り、世界の名著を原書で読みたいと、マルクス・アウレリウスの『自省録』やヒルティの『幸福論』、聖書やプラトンの哲学まで原語で読破しようとします。死と向き合う中でそれらの書物を読むことにより、自己認識を深めていったのです。それまで自分ひとりで混乱していた苦悩を、より広い展望のもとで相対化して捉え、同時に、苦悩のより普遍的な意味にまで降り立つことで、少しずつ苦しんでいる自分を受け入れることができるようになったのかもしれませんが。そして、三谷隆正という師を得て、この世が涙の谷に終わるのではなく、新しい人生へと踏み出していくよう背を押されます。

奇跡的に生きながらえ、24歳のときに父、多門の仕事に伴って渡米し、フィラデルフィア郊外にあるクェーカー派のペンデル・ヒル学寮で暮らします。このアメリカ時代に親友となる浦口真左と出会い、医学転向への励ましを受け、ついに父親から許しを得て医学を学び始めます。若き日々の苦しい経験から徐々に癒されていき、再び生かされたいのちをどのように使うのか、神谷さんもまたフランクルと同じように考えたのでした。医学生時代の『若き日の日記』には、迷いや苦しみを経て神谷さんが再びの生を歩み始めていく過程が、書物や自己との対話を通して内面豊かに綴られています。

先にも触れたように、東京女子医専在学中の29歳の時に見学を兼ねた実習で、瀬戸内海の長島愛生園を訪れます。その時の詩「癩者に」を資料に紹介しました。パワーポイントにも載せてあります。この詩の一節、「何故わたしたちでなくあなたが？／あなたは代って下さったのだ」<sup>23</sup>という言葉に注目したいと思います。自分は奇跡的に癒され、助かったけれども、苦しんでいる人が今、ここにいる。この人たちは苦しみを、自分に代わって引き受けてく

---

<sup>23</sup> 神谷美恵子『うつわの歌 新版』前掲、22 - 24 頁。

ださっているのだ、と。自分の生と引き代えるかのように、亡くなった者たちがいる。なぜ、死に逝く人がいる一方で、自分は生きながらえ、助かったのか。この思いは、フランクが強制収容所から生還したときの感情に共通するものがあるように思われます。

人間にとって愛することと死ぬこととは、どちらがより根源的、本質的なのでしょうか。神谷さんは、自らの生の代償として「苦しみと悲しみの十字架」の刻印を我がものとして引き受けながら、死ではなく愛することのほうに開かれていきました。「愛」とは単なる肉親の愛情とかいうものではない。αγαπη, Caritas [キリスト教的人類愛] のことだ。すべて悩める人、苦しめる人に対して私たちは負い目ある者なることを理屈なしに感じてしまうあの心情のことだ。<sup>24</sup>「人類の悲しみが身に沁み、その傷の上にあの香油のような水を注ぎたい心が頻りに湧く。」<sup>25</sup>と『若き日の日記』にあるように、再び生かされた命のかけがえのなさを、特定の一個人を超え、かなしみと愛の融和した普遍的な人類愛の実践へと生かされていったのです。

## (2) 『生きがいについて』が描くもの

結婚、戦後の困窮生活、病気の子どもの育児と実生活のさまざまな試練を経て、長島愛生園入居患者の精神医学的調査をきっかけとして、所期の目的であったハンセン病患者さんとの関わりが生まれたのは、実に42歳になってからでした。療養所の患者たちは、ハンセン病だけでなく精神疾患によっても苦しみ、差別され、二重の意味で医療の外に置かれた状況にありました。

パワーポイントに長島愛生園のホームページから写真を紹介させていただきました。以前、神谷さんの生誕百周年を記念した集いに参加した際、長島愛生園の見学ツアーに参加する機会に恵まれました。そのときに案内のガイドさんからうかがった話によれば、この地は養殖が盛んな地域だそうですが、現在でも近隣住民や漁業者との間に軋轢や、風評被害があるのだそうです。今、島と対岸は長い橋で結ばれています。しかし、当時の栈橋や、療養所に収容された患者が真っ先に行かされる全身消毒のための浴室だとか、ハンセ

<sup>24</sup> 神谷美恵子『若き日の日記』みすず書房、1984年、208頁。

<sup>25</sup> 同上、183頁。

ン病患者に対する偏見・差別がひどかった隔離政策時代のことをリアルに偲ばせるものが残っており、衝撃を受けました。絶対隔離を主張した光田健輔院長のもとで医師として勤務していた神谷さんに対して、今いろいろな意見があるのも事実ですが、当時いた患者さんの中で神谷さんのことを悪く言う人は一人もいなかったそうです。

神谷さんは、日記の中で自分の使命を「魂の認識への献身」と表現しています。自分は、「魂の認識」に献身し、これを文学的に表現することによって、この献身の任務と苦痛に耐えていくべき人間である」<sup>26</sup>と。ここでの「認識」とは、「認識」を意味するフランス語のうち、対象化して抽象的に認識する *savoir* ではなく、「co 共に - naître 生まれる」という語源をもった *conaitre* のほうの認識、つまり共に生き、共に苦しみながら相手を心の内から理解し、分かろうとする認識です。患者さんたちの肉体的・実存的苦悩に直面する中で、常に病む者、苦しむ者の傍らにあらうとし、この「魂の認識への献身」が名著『生きがいについて』を生みます。

優れた文学的感性をもち語学に秀でていた神谷さんは、『生きがいについて』の中で種々の文学的・思想的作品を取り上げながら、また時に自らの体験にも語らせながら、患者さんたちの肉声と声に出されなかった心の声を届けようとしているかのようです。いわば人間の生の負の局面から、人間の生きる意義を逆光線のように濃やかに照らし出していくのです。生きがいについてを主題にしながらも、中心部分はまさに生きがいを喪失した人の心の世界なのです。そして、そこから人間がどのように再びの生を、新しい生きがいを見出していくのか、再びの生を得るまでの過程が本書の中心部分を成しています。

『生きがいについて』は、大きく分けて三部構成と見做すことができます。まず最初に、生きがいとは何であるのか、何が生きがいの対象となりうるのか、という予備的な考察がなされます。次に、生きがいを失った人の心の世界が描かれます。しかし、そこから再び立ち上がって新しい生きがい、再びの生を見出していく有様が描写されます。ここで思い出されるのが、

---

<sup>26</sup> 同上、309頁。



旧約聖書の「ホセア書」の危機の三段階を歌った6章1節以下です。「さあ、我々は主のもとに帰ろう。主は我々を引き裂かれたがいやし、我々を打たれたが、傷を包んでくださる。二日の後、主は我々を生かし、三日目に立ち上がらせてくださる」(ホセア6:1-2)。「三日目に立ち上がらせてくださる」は、イエス・キリストの復活の予型です。どん底の状態から起こされる、主によって起こされる、とはキリスト教の「復活」の考え方ではありますが、ここで神谷さんは「変革体験」ということを述べています。

『生きがいについて』には、深く味わいたい文章や箇所が沢山あり、欲張って資料にたくさん引用しましたが、時間がなくなってしまいました。あまり読めなくて申し訳ないのですが、この「変革体験」の部分には一緒に目を通したいと思います。人が苦しみの意味を求めて血みどろの葛藤と探求を経た上で、苦しみや悲しみを受け入れて、それと融合して再び新たな生きがいを精神の世界に見出していくまでの内面的な変化、いわば心の組み換え、これが神谷さんの言う「変革体験」です。以下、引用をお読みいたします。

苦悩の果てにやっと光に接するのであるから、この種の体験 [= 変革体験] には、ふつう大きなよろこびがともなう。しかしこれを受けとめる心の姿勢には、自らの力で苦闘して光をかちとったと感じるものから、まったく他者の力によって光を与えられた体験とするものまで、さまざまなニュアンスの差が見られる。自力と他力。そのちがいはどこからくるのであろうか。……しかし、じっさいの人間の心の体験としては、自力と他力はしばしば微妙に、密接にからみあっているのではないであろうか。これは、……ひとが自己を深く掘りさげれば、そこに結局みいだされるものは、大いなる他者とでも表現するほかないものであるところからくるのかも知れない。

ともあれ、真摯な探求と悩みなしに、ひとの心に光明がもたらされたためしはない。しかしまた精一杯の求道の後に発見される光は、自分ひとりの力で創りだしたものとしてはあまりにも輝かしすぎるのである。<sup>27</sup>

---

<sup>27</sup> 神谷美恵子『生きがいについて』前掲、236-237頁。

ひとたびこの世からはじき出され、虚無と絶望のなかで自己と対面したことのあるひとは、ふたたび生きがいをみいだしえたとき、それがどこにあらうとも、自己の存在がゆるされ、うけ入れられていることに対する感謝の思いがあふれているにちがいない。もっともささやかな日常のよろこびも、あの虚無の闇を背景に、その光と色のかげやきが増すであろう。陽の光も、木の葉のさやぎもすべて自己の生を励ますものとして感ぜられるであろう。そしてたとえもし現世のなにごとにも、なんびとにも、自分が役に立ち得ないとしても、いいあらし難いあの「瞬間」に、至高の力に支えられているのを感じたならば、その力のなかでただ生かされているというだけで、しみじみと生きがいをおぼえ、その大いなるもの前に自己の生命をさいごまで忠実に生きぬく責任を感じるであろう。<sup>28</sup>

もがき、苦しみ、どん詰まりにまで行って初めて生じるこの「変革体験」は、虚無と絶望に打ちひしがれていた人に、根底から湧き上がり浸透していく別種の喜びとを調和をもたらすものです。「自分の存在がゆるされ、うけ入れられていることに対する感謝の思い」、自分は生きていうよりも、むしろ何者かによって、「大いなる他者とでも表現するほかないもの」によって生かされている、支えられているという実体感。深刻な現世否定と自己否定を潜り抜けて、ようやく自分の生を受け入れることができ、他の人の生をも受容できるようになったときに初めて、私たちは生きることそのものを肯定することができるようになるのでしょうか。そして、この生かされ与えられた命に対して、生きることへの責任感と使命感が芽生えてくるのではないのでしょうか。そのようにして高次の愛を伴った「再びの生」が始まっていくのでしょうか。

ウィリアム・ジェイムズという哲学者・心理学者は『宗教的体験の諸相』の中で、「二度生まれの人」という概念を打ち出しています。一度は生への意

---

<sup>28</sup> 同上, 263頁。

欲を失った人が、救いを体験し、もう一度生きるようになった新生の体験が、多くの宗教者や詩人、名もなき人の回心や神秘的体験の具体例とともに紹介されています。神谷さんも『生きがいについて』の中で、宗教的回心に限定するのではなく、そのさまざまな様相を濃やかに描き出します。それは多様なかたちをとって現れますが、一方で、変革体験は生存全体に対して最も広く深く浸透し、生の基盤そのものから人間の生き方を変化させようものであるから、宗教的な領域へと近接することが明らかにされます。もちろん、必ずしもすべての人が宗教的な体験に開かれていくわけではないでしょうが、私たち人間には、どこか人間を超えたものからの関わりが、多かれ少なかれあるのではないのでしょうか。神谷さんは、キリスト教や仏教といった既成の宗教というよりも、「宗教という形をとる以前の心のありかた」として捉え直しています。そして、人間存在そのもののもつ宗教性のほうに目を向け、人間の精神全体が宗教の世界に包摂されているか、少なくとも接しているのではないかと洞察するのです。「変革体験」は、渡米時代に神谷さんがクエーカー派の沈黙礼拝で経験した「内なる光」の体験と重なるものがありますが、人間は超越からの働きを受容しうる存在であり、この超越に向かって開かれている存在であると言えるでしょう。

フランクも苦悩の意義を述べていましたが、神谷さんも苦悩や苦難というものが、「人間が初めて人間の生の条件を自覚する契機」となるのではないかと、洞察しています。苦しみというものが、人間の生が何に基づいているかを露わにするきっかけとなるのです。けれども、ここまでに至る過程がどれほどの苦闘と苦しみと悲しみに満ちたものであったか。だからこそ、今ここで再びの生を与えられたときの眩しさや光は、「人間を超えるもの……から注がれる配慮」として、恵みとして感じられるものです。それを私たちの言葉で「愛」や「慈悲」という言葉で表現するほかないものですが、紛れもない真実は人間が皆、「愛への渇き」を切実に有しており、その実体を説明し尽くすことはできないにせよ、「人間を超越したものの絶対的な愛を信じることが、この渇きを満たすのに十分であり、それが満たされて初めて「人間の心はいのちに満たされ、それが外に溢れ出ずにはいられないのだ」ということ

です<sup>29</sup>。これは、『人間を見つめて』という書物で神谷さんが述べていることです。

このことは、フランクルが強制収容所から生還後、新しい妻となるエリーと出会い、その後の人生を共にして、彼が亡くなる最期、エリーに本を残したエピソードを髣髴とさせるものがあります。フランクルが最後に書いた書物は、『苦悩する人間』でした。その献辞には妻のエリーへ宛てて、こう書いてあったと言います。「あなたは、苦悩する人間を愛する人間に変えてくれた」と。

## おわりに

フランクルも神谷美恵子さんも共に、苦難の経験を通して人間がそれによって生かされている生の意義、人間が人間を超えた存在と出会い、触れ合うような命の根源となり、その尊厳の由来するところ、そうした地平を示唆していると思われます。自己の存在意義を私たちはどこに見出すことができるのか。人間の生を根拠づけるのは何であるのか。『生きがいについて』の末尾はまさにその点に触れており、それは決して利用価値や有用性によるものではなく、自分自身の内でもなく、超越からの関わりの中に、他者の中に見出されることが病める人たちに託して締めくくられています。

時間が来てしまいましたので、これで最後にいたします。フランクルに戻りますが、フランクルのいう「無意識の宗教性」あるいは「意識されない神」という考え方についてです。物事が首尾よく進んでいる通常では、意識されないけれども、制約された状況や困難の中で期せずして「神」という存在が意識に立ち昇る、あるいは立ち現れることがあるのではないのでしょうか。この意味で、人間というのは「神に対して志向的な関係を常に既に有している」とフランクルは明言しています。

人が苦しんだり悲しんだりする、私たちが時間の中で創造したり、体験したり、苦悩したりしていることは、だから「同時に永遠に向かって創造し、体

---

<sup>29</sup> 神谷美恵子『人間を見つめて』みすず書房、1980年、110-113頁。

験し、苦悩しているのだ」と فرانクルは言います<sup>30</sup>。日常は平凡でつまらないものかもしれません。でも、この日常には無限の奥行きがあって、実はそういう日常を通して、今、出来事を通して私たちは問われ、それによりよく応えることによって、意義の根源にある「神」に、人間を超えた存在である永遠にまみえているのではないか。そういう聖なるものに出会う場が、実は開かれているのではないのでしょうか。苦難を通してフランクルと神谷美恵子さんの思想は、そのことを明らかにしていると思います。

森有正は「経験が一人の人間を定義する」(『バビロンの流れのほとりにて』)と述べました。森の「経験」という考え方に触れたかったのですが、時間を超過してしまいました。苦悩や苦難は、それがその人の本当の意味での「経験」となり「再びの生」という新しい地平を拓き、救いとして経験されたときに初めてその意義を語りうるものとなる、ということを経験されたときに私を終わらせていただきます。ご清聴をどうもありがとうございました。

補足：ロシアによるウクライナへの軍事侵攻を目の当たりにしている今、ウクライナを初めとする戦禍の中にいる人たちの「苦難」を思うとき、無力感を覚えざるを得ません。講演後の質疑応答で参加者からのご質問を受けて、フランクルが愛したラビ、レオンバックによる「民族間の和解と平和の祈り」<sup>31</sup>を紹介させていただきました。

なお、釘宮のフランクル論については「ヴィクトール・E・フランクルの人生観と宗教観——「意味の根源としての神」、『日常の中の聖性』白百合女子大学キリスト教文化研究所編、2021年、神谷美恵子論については「神谷美恵子とキリスト教——魂の認識への献身と人間の宗教性」、『上智大学キリスト教文化研究所 紀要 31』2021年、を参照していただければ幸いです。後者はWeb上からも閲覧できます。

付記 本稿は2022年5月21日(土)京都ノートルダム女子大学カトリック

---

<sup>30</sup> V.E. フランクル『それでも人生にイエスと言う』山田邦男・松田美佳訳、春秋社、1993年、158頁。

<sup>31</sup> クリングバーク、前掲書、497-498頁。

神谷美恵子とフランクル—苦難の経験が開く地平

教育センター主催「春の講演会」における『神谷美恵子とフランクル—苦難の経験が開く地平』をタイトルとする講演を文字起こししたものである。